

原発立地自治体並みの原子力安全協定の締結を求める請願も不採択に 請願者はいまも収束しない福島原発事故の実態を切々と訴え

今議会で注目されてきている請願、陳情の審査が14日の総務常任委員会で行われました。

このうちのひとつは、「つなげよう 脱原発の輪 上越の会（植木史将代表）」から提出された、「東京電力との原子力安全協定に関する請願」です。



請願の趣旨を説明した植木代表は、3年前に発生した東京電力福島第一原発の過酷事故で原発のある自治体や周辺住民がいまなお苦しんでいる実態を紹介しながら、原子炉施設の増設や装置の変更、再稼働などの際には、上越市が事前了解を求められる原発立地自治体並みの協定が必要であると述べ、現在、上越市が東京電力との間で結んでいる協定の充実・強化を訴えました。

私は、(昨年1月、上越市を含む県内28市町村と東電が結んだ)現協定は、協定前から比べれば一歩前進

だった。しかし、(請願者が主張するように)事前了解まで踏み込めない。立地自治体並みに協定を(改善)充実することに賛成だ」と採択を主張しました。

これに対して、他の委員からは、「現協定で十分だ」「再稼働の可否の判断をするだけの専門的知見を市で保持することができるのか疑問だ」といった趣旨の発言があり、採決の結果、賛成3、反対4で不採択となりました。

先週の「ガス水道局談合問題での百条委員会 委設を求める陳情」の不採択に続き、市民の願いに背を向ける結果となりました。

産業建設グループの集約、試行の延長を求める陳情も不採択

この日は市民が注目している陳情の審査も行われました。「くびき野地域問題研究会」(後藤紀一代表代行)と「東頸城の明日を考える会」(吉野誠一代表)が提出した、総合事務所産業建設グループ集約の試行の延長を求める陳情です。

両団体とも、市民にこれまでの試行結果と検証内容が十分伝わっていないこと、大雪の下での検証ができていないことなどを理由に試行の延長を求めました。

私と市民クラブの近藤委員、それと石平委員が採択に賛成しましたが、他の委員は本実施に踏み切ること認め、不採択を主張しました。採決の結果はこれも3対4で不採択でした。

なお、この陳情審査の前に産業建設グループ集約の問題で所管事務調査が行われました。当初、総務管理部が示した事務事業ごとにどういう検証結果が出ているのかを質問したところ、

行政側は事業ごとには結果を示せず、全体的な評価に終始しました。検証できなかった事務事業数も明らかに出来ませんでした。

合併後、確かに除雪体制も充実してきており、その点は(歴代の)市長の努力を評価しますが、新たな体制でもうまくいくかどうかは別問題です。多くの人が心配しています。

新水族博物館にも質問が集中

この日、企画政策部関係では、並行在来線対策事業と新水族博物館整備事業に質問が集中しました。

このうち、新水族博物館については、現水族館と新たな水族博物館を同じ業者・団体に指定管理者になってもらうと説明されてきたことから、どういう協定書になるのかわかるように、検討素案を示すよう求めましたが、示してもらえませんでした。「こんな感じになりますよ」というものくらいは出してほしかったですね。

委員会では設計コーディネーター、展示・演出手法等アドバイザー業務委託などがなぜ必要になるのかの質問もありました。

私の一般質問は24日の3番手です

今回の私の一般質問は、原発、医療、市町村合併の総括の3つをとりあげます。登壇するのは24日(月)の3番手ですので、早ければ午前11時半から、遅くとも午後1時頃からはとなりそうです。JCVで中継があります。



【タムシバ】漢字で書きまします。モクレン科の落葉小高木。花が咲くとい匂いがするから、「ニオイコブシ」とも呼びます。写真は吉川区と浦川原区の境付近で撮りました。

原発立地自治体並みの原子力安全協定の締結を求める請願も不採択に 請願者はいまも収束しない福島原発事故の実態を切々と訴え

今議会で注目されている請願、陳情の審査が14日の総務常任委員会で行われました。

このうちのひとつは、「つなげよう脱原発の輪 上越の会(植木史将代表)」から提出された、「東京電力との原子力安全協定に関する請願」です。



請願の趣旨を説明した植木代表は、3年前に発生した東京電力福島第一原発の過酷事故で原発のある自治体や周辺住民がいまなお苦しんでいる実態を紹介しながら、原子炉施設の増設や装置の変更、再稼働などの際には、上越市が事前了解を求められる原発立地自治体並みの協定が必要であると述べ、現在、上越市が東京電力との間で結んでいる協定の充実・強化を訴えました。



私は、「(昨年1月、上越市を含む県内28市町村と東電が結んだ)現協定は、協定前から比べれば一歩前進だった。しかし、(請願者が主張するように)事前了解まで踏み込めない。立地自治体並みに協定を

(改善)充実することに賛成だ」と採択を主張しました。

これに対して、他の委員からは、「現協定で十分だ」「再稼働の可否の判断をするだけの専門的知見を市で保持することができるとか疑問だ」といった趣旨の発言があり、採決の結果、賛成3、反対4で不採択となりました。

先週の「ガス水道局談合問題での百条委員会委設を求める陳情」の不採択に続き、市民の願いに背を向ける結果となりました。

産業建設グループの集約、試行の延長を求める陳情も不採択

この日は市民が注目している陳情の審査も行われました。「くびき野地域問題研究会」(後藤紀一代表代行)と「東頸城の明日を考える会」(吉野誠一代表)が提出した、総合事務所産業建設グループ集約の試行の延長を求める陳情です。

両団体とも、市民にこれまでの試行結果と検証内容が十分伝わっていないこと、大雪の下での検証ができていないことなどを理由に試行の延長を求めました。

私と市民クラブの近藤委員、それと石平委員が採択に賛成しましたが、他の委員は本実施に踏み切ることを認め、不採択を主張しました。採決の結果はこれも3対4で不採択でした。

なお、この陳情審査の前に産業建設グループ集約の問題で所管事務調査が行われました。当初、総務管理部が示した事務事業ごとにどういう検証結果が出ているのかを質問したところ、行政側は事業ごとには結果を示せず、全体的な評価に終始しました。検証できなかった事務事

業数も明らかに出来ませんでした。合併後、確かに除雪体制も充実してきており、その点は(歴代の)市長の努力を評価しますが、新たな体制でもうまくいくかどうかは別問題です。多くの人が心配しています。

新吉川保育園は公設民営方式

上越市は20日の吉川区地域協議会において、吉川区内の3保育園の統合方式について方針を明らかにしました。



それによると、園舎は市が建設し、保育園の運営は、現在、吉川保育園を運営している社会福祉法人・吉川福祉会が行うとのこと。新保育園は3年後の平成29年度に開園の予定です。建設場所は未定。今後、区民の声を聴いたうえで、吉川区地域協議会でしっかりと議論してほしいと思います。

私の一般質問は24日の3番手です

今回の私の一般質問は、原発、医療、市町村合併の総括の3つをとりあげます。登壇するのは24日(月)の3番手ですので、早ければ午前11時半から、遅くとも午後1時頃からはJCVで中継があります。



【タムシバ】漢字で書きます。モクレン科の落葉小高木。花が咲くとい匂いがするところから、「ニオイコブシ」とも呼びます。写真は吉川区と浦川原区の境付近で撮りました。

春よ来い 第二九七回 手っばずれ

笑っちゃいましたね。何のことはない、大本は私だったのです。

先日のこと、テールの上でリンゴの皮をむき、包丁で切れ目を入れ、リンゴの一部を口に入れようとした時でした。リンゴがほぼ真ん中で割れ、割れた片方がポンと飛び上がりました。一瞬、床に落ちるかと思ったのですが、運よく、再び、私の手のなかに入ったのです。

ホッとすると同時に、「いやー、危うく手っばずれするところだった」と私が言うのと、長男が、「実際、手っばずれしたんじゃないの」と口をはさみました。この時、私は、リンゴが落ちなかったんだから、手っばずれではないと言おうとしたのですが、手から離れたことは事実ですし、文句を言う気にはなりません。それよりも、長男が「手っばずれ」という言葉をよく知っているなど感心しました。

「おまん、よく、手っばずれという言葉を知っているな」
 そう言ったところ、今度は妻が口出してきました。

「あら、やだ、自分で手っばずれという言葉を広めたんじゃない、家中に」というのです。

妻も子どもたちも「手っばずれ」という言葉を憶えたのは、よそではなく、私が何度も使っていたから憶えたというのです。しかも、私はいつも「言い訳」としてこの言葉を使っていたというのです。自分の失敗を認めたくないから、手のせいにして、自分の意志とは全く関係ないところで何か勝手に手を離れた、そういう意味合いで使っていたというのです。

「手っばずれ」という言葉は、ずいぶん前から使っていた記憶があります。たぶん、子どもの頃からでしょう。家族みんなでご飯を食べている時に、ちよつとした拍子に茶碗を落として割ってしまったことがありました。押さえていたはずなのに、うっかり滑らせてしまい、鍋をひっくり返したこともありま

私のみわりでは、手を滑らした時だけでなく、もっと広い意味で「想定外のこと」が起きた時にも使っていたように思います。例えば、「どこどここの家んしょ、手っばずれして子どもができたみたいだ」といった調子です。

「手っばずれ」という言葉は、現在、ほとんど使われていません。世間でよく言う「死語」になってしまった感があります。それでいながら、わが家では、最近、この言葉を使うことになる事態が多くなってきました。使っているのはもちろん私です。還暦を過ぎ、注意力だけでなく、運動能力も明らかに低下してきました。「おっつ」と「おっ」という言葉を使う余裕もないほど、すぐに「手っばずれ」をしてしまいます。

考えてみると、わが家では子どもたちも含めて、「死語」に近い言葉をけっこう使っています。「さんざテレビを観ていた」「ふんだすけ、そつつあなとこへ行くなと言ったろが」「そんがにゆくりしてると、また、げっぱになっちゃうど」などの言葉は、わが家ではまだ現役です。

二年ほど前、誘われて高田の町にある居酒屋へ入った時のこと、カウンター脇に相撲文字で書かれた「高田ことば番付表」の手ぬぐいが貼ってあり、懐かしさで胸がいつぱいになりました。たしか、そのなかには「ばらこくたい」などと一緒に「手っばずれ」もあったように思います。そろそろ、わが家でも「『ほーせ』ことば番付表」を作っておいた方がいいかも知れません。



「巣立ち」など執筆エピソードを紹介

16日、年金者組合上越支部の「春のつどい」に参加してきました。上越市だけでなく妙高市からの参加者もありました。

第1部で私が書いている随想シリーズ、「春よ来い」について話をしてほしいと要請され、「暮らしの中にある“幸せめつけ”を書き続けて」と題して約50分、話をさせていただきました。

大学に入るまではほとんど文章を書かなかった青年であったのに、なぜ書くようになったのか。自治会活動や落語研究会での経験などを語りました。

随想を定期的を書くようになったのは20年前からです。これまで書いてきたもののなかから、「雪椿」「巣立ち」「ベニコブシ」「ひ孫」誕生のエピソードを語りました。みなさん、自分の体験と重ね

合わせ聴いてくださったようです。

質問の時間には、文章のことだけでなく、「しゃべり」についてもたくさん質問が出ました。いい勉強になりました。

私は第2部まで参加し、フラダンスや組合員さんたちの自慢の歌も楽しませてもらいました。主催者のみなさん、ありがとうございました。

なお、私の5冊目の随想集、『背中かき』（北越出版、1000円）は4月1日に刊行の予定です。



上越地域各消防署における空間放射線量測定結果（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	3月12日(水)	3月19日(水)
上越南消防署	0.033	0.033
上越北消防署	0.050	0.050
新井消防署	0.040	0.050
頸北消防署	0.036	0.043
頸南消防署	0.050	0.037
東頸消防署	0.050	0.060
高士分遣所	0.050	0.047
名立分遣所	0.047	0.047